

2008年(平成20年)

第5号

(5月15日)



発行所：立正佼成会 京都教会
 発行責任者：渉外部長 宮地啓安
 〒605-0041 京都市東山区三条蹴上
 TEL (075)762-2211 FAX (075)762-2266

青年の手による世界平和のための実践の日「青年の日」について

5月18日、全国の青少年部員が社会や国家、世界平和のために具体的な菩薩行を実践する「青年の日」が開催されます。

そして、その日の正午、教会で、家庭で、または職場で、世界平和への願いをひとつにする全国の青少年が共に、世界平和を祈ります。

.....
 (平和の祈り)

世界には、貧困、飢餓、伝染病、戦争、テロ、人種差別など、さまざまな問題が山積みしています。そして今この瞬間にも多くの尊い生命が失われ、悲しみの声につつまれているのです。

私たちは、この現状に無関心でいるわけにはいきません。なぜなら、私自身の中にこそ、さまざまな問題を起こす「平和を乱すところ」があるからです。

私自身の「平和を乱すところ」を、今までどれくらい見つめていたでしょうか。毎日の生活の中で起こる様々な気持ち、貪り、怒り、愚かさ。自分の心を深く見つめていけばいくほど、他の誰も責めることはできなくなります。

そんな私から、まずはじめませんか。私がやさしくなりません。目の前にいる人を大切にしよう、家族へ思いやりの心をつくそう。そして、すべてのひと・すべてのものを大切にしよう。

この世の本当の姿である、すべてのいのちが尊ばれる、一乗の世界。大いなる一つのいのちである 一和一の世界を、すべての人と分かちあいたい。この誓いが世界中のいのちに届くまで、祈ります。

そして、行動します。

黙祷 (30秒)

.....

京都の青少年部員は、この日、教会に集合して、自らの「平和の心」を築くための学習会を実施します。そして、その心をもって午後には、市内の繁華街に出て、市民にユニセフ募金を呼びかけます。

全国の青少年部員が、若さと行動力をもって、立ち上がることで、世界の平和実現に一歩でも近づくことを期待したいものです。みなさんからの力強い応援をお願いします。

続：アフリカへ毛布をおくる運動

前号でなぜアフリカに毛布が必要なのか、どんな毛布を届けることができるのかをお知らせしました。おかげさまで教会にぞくぞくと毛布があつまり、5月10日現在、集まっている分だけでも早くも200枚ほどになりました。

京都教会では毎年、支部ごとに毛布回収活動を行っていますが、支部によっては一般家庭だけではなく、病院やホテル、クリーニング屋などにも毛布の提供を呼びかけています。5月中旬頃から本格的に支部から教会へ毛布が集まってきます。

当運動では毛布だけではなく、毛布を送る輸送費のご協力もお願いしています。日本からアフリカの方に毛布が手に届くまで900円の費用が必要です。自身の手で1枚の毛布を遠いアフリカの人々の手に届けることが出来ます。

《振込先》

郵便局口座名義：アフリカへ毛布をおくる運動事務局
 郵便局口座番号：00110-6-351756

郵送協力金は年間を通して受付けていますが、集計の関係上2008年8月29日を目処にお振込み頂ければ幸いです。昨年は全国で11万4430枚の毛布が集まりました。今年も1枚でも多く届けたいと思います。

時事刻々

国内の写真店は、○一年の二万七千店が○七年には一万五千店とほぼ半減(全日本写真材料商組合連合会)。その要因は、大手チェーンによる価格破壊に加えて、デジタルカメラ(デジカメ)の普及によって、写真プリントの需要が激減していることにある。

これまでも、新たな技術の登場により、姿を消したものは数多くあり、今まであったものがないこと、一抹の寂しさがある。それ以上に当事者にとっては大問題である。

しかし一方では、デジタル技術を使った、新商品や新サービスも続々と登場している。デジカメで撮影した写真から自分だけのオリジナル写真集を作ることが出来る「フォトブックサービス」が広がっている。

いつも、時代の節目には新旧のせめぎ合いが起こる。それは、新しい時代をつくる「産みの苦しみ」かもしれない。常に、明日に夢をもちたいものだ。

諸宗教対話のコーナー

宗教協力

庭野開祖が法華経に出会ったときから心に抱いていた強い念願の一つとして、仏教の三大霊山であるインドの霊鷲山・日本の比叡山・そして中国の天台山への参拝がありました。ご存知のとおり、霊鷲山は釈尊が法華経を説かれた地であり、比叡山は前号までに書かせて頂いたように開祖が山田恵諦座主より様々なご教示を頂かれた場所でもあります。そして天台山は隋の時代、598年に天台大師智顛によって開かれ1400年近い歴史を持つ寺であり、遣唐使として中国に渡った伝教大師最澄が仏典の研鑽に没頭され、日本に帰国して比叡山をひらかれたことは皆さんよくご存知のこ

とだと思います。

この中国と開祖さまのことについて語りたと思います。開祖は恩師新井助信先生（開祖が法華経を学んだ方）より「霊鷲山・天台山・比叡山に参拝してはじめて法華経の教えの本家本元へ道がつながることになる」と教えて頂いていたのです。その念願の天台山参拝が昭和57年に中国仏教協会からの招待で実現したのです。その招待につながる以前、第一回世界宗教者平和会議開催にあたり中国代表团にも是非参加して頂きたいとつねに願っていた開祖でありましたが、文化大革命のさなかで宗教者との連絡方法もわからない状況の中で突然一通の招待状が届きました。以下次号に続く。

一食（いちじき）を捧げる運動

「一食を捧げる運動」の精神～SPIRIT

● 「一食を捧げる運動」とは

朝食や昼食を食べず、それに使うはずだったお金を世界の人道的援助、開発援助などに役立てていく運動です。毎月1日と15日に「一食の日」として実施しています。食事を抜くことが難しい仕事の方はたばこやその日のビールなど、発育途中の小中学生にはおやつやジュースなどを少し我慢し、募金しています。

国や民族、言葉や文化は違っても、今、共に地球に生きる「いのち」として物心を分かち合い、励ましあう、そして自分の心にも平和の砦を築く運動です。

● 「一乗」精神の発信

当運動は「すべてのいのちは、大いなるひとつのいのちに生かされた同根の兄弟姉妹である」という仏教の世界観、「一乗」の精神に基づいています。当運動を通して、いのちの尊さ、思いやりの心を伝え広めます。

● 3つの精神

【同悲】 食事などを抜き、意識的に空腹感を味わうことで飢餓に苦しむ人々の痛みを少しでも分かちあいます。

【祈り】 苦境にいる人々の心の平安、すべてのいのち

の平安を祈ります。そして自分自身の心を見つめ、自分自身の平和を乱す心を見つめます。

【布施】 食事や嗜好品を節して代金を献金し、自分に持っているものを捧げる心を深めます。

佼成会の会員から寄せられた浄財は「立正佼成会一食平和基金」として集約され、佼成会が行うプロジェクトや協力する支援団体と共に行うプロジェクトなど、さまざまな支援が行われます。前頁掲載の「アフリカへ毛布をおくる運動」にも役立てられています。



また、会員ではない一般市民の方から寄せられた浄財は日本ユニセフ協会を通じ、佼成会が指定している事業への援助に役立てられます。

まずはやってみましょう。日本に住んでいる私たちは1度食事を抜いても次は必ず食べられるのです…。

佼成会ミニ知識

食前感謝の言葉

立正佼成会では3度の食事前に「食前感謝の言葉」を唱和するようにしています。

「天の三光に身を温め、地の五穀に魂を養う～」という言葉がすぐに出てくる方は古参会員さんかも知れませんがね。

今は

仏さま 自然の恵み 多くの人に感謝して いただきます という言葉になっています。

生かされて生きる感謝の言葉。声を出して言えなくても心の中で唱えたいものです。

企業経営と平和のコーナー

「仏教を仕事に生かす」

日本の現状

日本の近代は「日本の常識は世界の非常識」「日本の利益は世界の不利益」といった側面を持ち続けて現代に至っているが、国家の枠内という狭い視野で「日本を再建しよう、良くしよう」としても意味がない。つまり日本の再建が、地球の利益につながらなくてはならない。そして、最大のテーマは「現グローバル・スタンダード＝アメリカン・スタンダード」に対するオルタナティブ(代案)としての「新グローバル・スタンダード」(世界的基準)を創作することであろう。

時代を変える

政治・経済・社会、どれをとっても暗く困難な時代ではあるが、考えようによっては面白い時代にいるといえる。受身の姿勢でグレーの時代を嘆くよりも、主体的に行動して自らが変革に参加し、時代を変えることができると考えてみたらどうだろうか。これからの時代をドキドキ、ワクワクしながら迎えるほうが、ずっと楽しく夢がある。まさしく日本版ビッグバンを迎えたいま、この国は危機の極みにあり、1945年の敗戦に続く経済敗戦を迎えたという論もある。そこでわれわれ一人一人が昭和の高度成長や平成バブルの再現ではない、グローバル・システムにおける21世紀型の日本再構築案の処方箋を創りださなくてはならない。

世界に貢献する

さらにそれは、たんに大競争型資本主義への追従ではなく、これまでの悪しき点の検証を前提に、人間の真の豊かさを追求した、新たな価値観を提案することが不可欠です。21世紀を楽しく夢ある時代にするためにも、個々の人々に課せられた非常に大きなテーマだと言えるのです。

理念と哲学

経営者や管理者にとっていま求められているものは、競争がグローバル化してくると「理念・哲学」を持たないものは生き残れないことである。昔からグローバルな活動をしてきた世界中の企業を見ると、経営理念の問題について真剣に取り組み、どの企業もなるほどと思うような理念を掲げている。

例えばジョンソン・＆・ジョンソンの場合「清潔で健康志向の健全な会社」というイメージを創るために、同社がそういうビジョン、使命感を社員に徹底的に教え続け、浸透させるために大変な努力をしてきたからなのである。従って同社は基本的な理念に合わないことは絶対にやらない。それほどまでに会社の理念・哲学を大事にしているのである。

企業が大規模競争の中で、戦っていこうとするならば、やはり理念の問題、哲学の問題を今一度考え直さなくてはならない。これは日本の政治や経済、社会全体に言えることであり、特に企業経営においては己の

利益のみにとらわれず、「社会や世界に貢献するための事業を営むのだ」というくらいの理念・哲学がないとこれからの時代は生きられない。そういう意味でいかにして理念や哲学をきちんと身につけるかということも、大規模競争時代の日本にとっては大きな課題なのである。

人生観

いま人類は何が豊かなことなのか、何が幸せなことなのかという価値観全体を、再創造、再構築していかねばダメな時期に来ている。その危機的状況の中で色々なことに気づいた人が、自分の気づいたことをテーマにして、どうチャレンジしていくか、どう社会変革に企業経営に結び付けていくか、ということが非常に重要になっているのである。人の痛みがわかり、世界の悩みがわかり、どこに出しても恥ずかしくない価値観全体を持った人は、今ではほとんど見つからない。

もしかすると、いまの日本でグローバル・スタンダードから一番遠いのは人間そのものなのかもしれない。21世紀のネットワーク社会では、アメリカだろうが、日本だろうが、避けて通れないスタンダードというものがある。それはネットワークというものの本質である。それを突き詰めていくと、最終的には価値観がグローバル・スタンダードになっているかどうかということが必ず問われることになる。

利他と共生

「共生・共感・調和・創造」等の価値観そのものがグローバルに受け入れられる。そういう人間を育てること、そのための制度やシステムを整えることも、今の日本が取り組むべき重要な課題であると思われる。日本人はすぐにモデルとなるものを探そうとするが、そうした国や地域はない。従って、どこか一国の真似をすればいいという問題ではなく、色々な国から良いものを学びながら日本の伝統的価値観において、それを内在化していく努力が必要なのである。

特に資源に恵まれない日本は、世界中の国と良好なネットワーク築くことが最大の存立基盤であり、外国との友好関係なしには、この日本社会の利益・繁栄を維持することは不可能なのである。世界が平和であることで最も恩恵を受ける国が日本である特性から考えると、日本が世界の安定のために尽くすことは義務であり、最優先に取り組むべきテーマでもある。

では、仏の教えから見ればどういう「哲学」が生まれてくるのか。端的に言えば「利他と共生」の思想である。これまでのように「自分さえよければ」ではなく、何ごとにもまず「世のため人のため」という考え方が大前提であることです。個人も企業もこれに徹することができれば、その結果は必ず自分の所にも返ってくる。それが、すなわち「共生」そのものなのだ。

庭野開祖の宗教観・平和観 「一乗の道」

《ガンジー翁の心を》 WCRP への胎動

昭和42年、庭野開祖のもとにユニテリアン・ユニバーサリスト協会のホーマー・ジャック博士から「世界各国の宗教者が集まって世界平和を実現するための会議を開きたい」という話があった。

「1969年(昭和44年)はマハトマ・ガンジーの生誕百年の年にあたります。ガンジーの徹底した非暴力主義の平和運動を引き継ぎ、この年を期して世界の宗教者が一堂につどって平和について語り合う会議を開きたい」という趣旨だった。

翌、昭和43年1月、国立京都国際会館で「平和についての日米宗教者京都會議」が開かれ、主催者の一人として挨拶を求められた庭野開祖は「人類の平和が今ほど求められている時はないのに、宗教者が互いに手をたずさえる勇気を持ってないとしたら、宗教は人類の進歩に貢献する道を失うことになりましょう。世界の宗教者が一つの心になることこそ急務だと思います」と自らの信念を述べた。

そして「ガンジー翁の非暴力主義こそ宗教者の平和運動の出発点ですが、生誕百年祭といえ、もう一年しかありません。世界の宗教者が集まるのには準備期間が必要です。たとえ二年かかっても三年かかっても、ガンジー翁の精神によって世界平和を実現しようと、みんなで手分けして世界に呼びかけていこうではありませんか」と提案をしたのである。

その庭野開祖の提案は「1969年(昭和44年)後半か1970年(昭和45年)前半に、平和のための世界宗教者会議を開催することについて時宜を得たものと認める」と満場一致で採択された。

《よき友を得て》

京都での会議のあと、庭野開祖はユニテリアン・ユニバーサリスト協会会長のディナ・グリーン博士、ホーマー・ジャック博士と、互いの信仰について話し合う機会を得た。グリーン博士は、アメリカの宗教者の決意を切々と訴えた。「日米両国の間にある太平洋を、互いを隔てる海ではなく、小さな池にしてしまわなくてはなりません。それには、日本とアメリカの心をつなぐその先頭に宗教者が立つことで。宗教者こそ平和の先導者にならなくてはなりません。ベトナムの人たちの間にも、アメリカの兵士やその家族の間にも

悲しみがあふれています。アメリカがベトナムでの戦争をやめるよう、世界の宗教者が声をそろえて呼びかけて欲しいのです。そうすればアメリカは必ずベトナム戦争をやめます。そのための宗教者の会議を開きたいのです。

私の国の政府はいま大きな誤りをおかしています。私たちは国務長官と三度も話し合いました。国務長官も大統領も『ベトナムで共産主義を抑えなければ戦争はさらに拡大する。我々は世界戦争を予防しているのだ』と考えています。しかし私たちはむしろ**その考え方が世界戦争の危機をあおっている**と考えています。」

アメリカの宗教者の勇気に心を打たれた庭野開祖は「太平洋戦争の時、日本の宗教者は無謀な戦争をやめさせるために政府に働きかける勇気を持ってませんでした。そのために全国の都市がつぎつぎと焼け野が原になり、沖縄では少年少女まで戦って玉砕し、ついに広島と長崎に原爆が投下される悲劇が起きました。

日本とアジアの国々、そしてあなたのお国の人たちを含めて、どれほどの人命が犠牲になったことでしょうか。宗教者は、勇気を持たなければ一人の人さえも救うことができないことを、あらためて教えていただいた思いです。この現代の世界で私たちが宗教者としての使命を果たすのには、どうしても世界の宗教者と力をあわせ、その力を結集しなければなりません。世界の宗教者が一つになること、それがいちばんの急務です。

宗教協力は、まず互いに知り合うことです。離れていると誤解が生まれ、反目しがちです。出会って話し合えば、理解が生まれます。相手を理解できると協力できます。たがいに理解しあい、協力しあうその場から平和が広がるのだと言っていていいでしょう」と正直に自身の思いを告白した。

グリーン博士は立正佼成会の本部・大聖堂に集う会員の姿を見て「立正佼成会は行動する宗教ですね。その秘密は仏陀の教えを生活の中で身を持って実践する宗教だからだと思います。寛容と愛他の精神で宗教協力を進めておられる」と感嘆して言われた。

このグリーン博士、ジャック博士との出会いが、それからの庭野開祖の宗教活動を決定する大きな出会いの一つになったのだ。(つづく)

渉外部からのメッセージ

桜の季節から新緑が青々と葉をつけ新たな生命の息吹を感じるこの時期に「青年の日」が行われることは大変意義深いものを感じます。

ご本部法輪閣の横に古木の中から新木が生えています。まるで開祖さまの歩まれた道を青年が継承してい

るように見えます。自ら生きようとする力を温かく見守る社会でありたいものです。

この「平安月報」は下記アドレスからダウンロードできます。是非、ご覧ください。

http://www.rkk-kinki.jp/kinki/thats_kyoto.html